



新春交流会 ―世代や国境を越えて―

昨夏、「世田谷区国際平和交流基金助成事業」の「国籍、民族等の異なる人々の文化的違いによる偏見又は不当な差別の解消を目的とする事業」に助成金を申請した結果、「世田谷区が多文化共生のモデル地域になれるよう、日本人が求められる気づきとその解消に向けて」という事業の名称で、アジ風の事業計画に助成金が交付されることになりました。それを受けて、今年2月1日に新春交流会が開催され、昭和女子大学の大会議室で、アジ風会員・留学生・非会員並びに鷗友学園中高生、昭和女子大学生の総勢約130人が参加して、大盛況のうちに終了致しました。



〈アンケートの報告をする鈴木さん〉

プログラムは、加納啓良理事長の開会の挨拶の後に、昨年秋にI



〈グループディスカッション〉

メイト留学生、元Iメイト学生を対象に行ったアンケート「日本社会、日本人に対する外国人の意識・実態調査」の回答集計結果(189名に送付して約44%の83名からの回答を得た)を世田谷区在住会員の筆者が発表し、それを参考にしてパネルディスカッションを行いました。

モデレーターは昭和女子大学准教授のシム・チュン・キャット先生で、パネリストは元Iメイト学生で現在会員の3名(チャン・トゥ・チャンさん、仲村クスマーさん、ジャンミャオさん)と法人会員の阪和興業株式会社人事部の堀良行さんの4名でした。シム先生の見事な司会・進行で活発な議論がなされました。(*P2参照)

その後のランチはピュッフェ形式で、食事をしながら参加者同士、自由な懇親会となりました。清華大学大学院留学生の陸映睿さんの二胡と、同じく王彦珺さんのトランペット演奏もあり、会場は非常にリラックスした雰囲気となりました。

次はグループディスカッションです。上記のプログラムを踏まえて全参加者が13グループに分かれてテーマについて話し合い、各ファシリテーターの進行の下に様々な意見が交わされました。時間の制約の関係から、鷗友学園の生徒さんたちを含む4



〈年齢を超えて〉

つのグループの代表にどんな話があったかを報告してもらいました。

懇親会も終盤になった頃、上高子イベント担当理事から参加者へのお礼の言葉があり、最後に事務局長の古海正子理事から今年前半に予定されている活動につきお知らせがあって終了・散会致しました。
(正会員 鈴木 一美)

～様々な切り口で異文化を考えた交流会～

私は、これまで国際的な活動にたくさん参加してきましたが、それは自分とほとんど同じ環境で教育を受けている人との意見の交換にとどまっていた。しかし、今回の交流会はこれまでのものとは違い、自分よりずっと豊富な海外経験がある方が多くいて、自分に新しい考えを持つ大きなきっかけを与えてくれました。

最も大きく影響を受けたのは、交流会後半に行われたグループディスカッションでの多文化共生について議論です。私たちのグループでは、特に言語・外見の問題や心の問題など、留学生の方のパーソナルな課題についてどのようにしたらそれらの問題を解消できるのか考えました。このような課題について話したり、考えた



ことはなかったもので、自分にとって良い経験になったと思います。

海外経験が豊富な会員の皆さんと様々な切り口で異文化についてお話ししているうちに、日本は自分が思っている以上に優しい国ではなく、凝り固まった一つの考えに縛られてしまっているのだと感じ、少しショックを受けました。しかし過去の歴史でも、人種間の差別問題は、トライ アンド エラーを繰り返しながら理想の関係に近づいていったと気付かされました。自分とは違う文化や考えを持っている人と接していることを念頭に置いて、自然に双方が歩み寄ることができる理想状態に近づくために、相手にとってわかりやすい単語を用いる「やさしい日本語」などの考えを学びました。この考え方を時間がかかっても広げ、実行することが、日本人の意識を変え、議題である多文化共生に繋がると思います。

他にも、今回の交流会で新しい考え方をたくさん知ることができました。また、自分の意見も発していくことで、考えを深めることができました。今回得た考え方を忘れずに、この先やってくるグローバルな時代を正しく生きていきたいなと思います。また、正しい考え方を広げることができるようにになりたいと思います。そのために、今後もこのような交流会に積極的に参加し、視野をもっと広げていきたいです。

(鷗友学園女子高等学校1年 大橋 美結)

～鷗友学園中高生6人の感想から～

- * パネルディスカッションで元留学生たちから生の声が聞けた。
- * 職場における外国人差別や、部屋を借りるときの面倒、アジア人蔑視など、日本の現状を客観的に理解できた。
- * 同じ考えや基準で生きている方が楽かもしれないが、自分の成長のためには異文化に接することを選択する、という発言に刺激を受けた。
- * グループディスカッションは、多様なメンバーの構成だったが、ファシリテーターがうまく発言を促してくれたので、自由に意見が言えた。
- * 日本は他のアジアの国に比べても、文化の多様性がすくなく、外国人とのお付き合いが下手なのだろうと思った。
- * 貴重な体験ができたので、このような機会にはまた参加したい。

パネルディスカッション（各氏の発言から抜粋）

シム・チュン・キャット（昭和女子大学准教授）



高校卒業後日本に留学して以来、日本で四半世紀を過ごしています。母国シンガポールは国籍を持つ人が6割で、それ以外は世界各国から来ているグローバル社会です。日本も徐々に変わりつつありますが、外国人との共生に関しては色々な課題を抱えているようです。今日は多文化共生、グローバル化、多様性とは何か、について話し合いたいと思います。

チャン・トゥ・チャン（ハノイ貿易大学→京都大学）

私は2011年に日本に来て大学に入学、16年に卒業し日本企業に就職して社会人4年目です。日本ではいろいろな国から来た人とも会えます。自分と違う人と接するときには相手のことを理解しないといけないので、面倒なこともあります。それよりもいいことの方が多いので日本に残ることを選びました。9年日本に住んでいて嫌だなと思ったこともありました。全体に楽しいことが多かったですね。ベトナムにいるときは、日本の情報はTVドラマくらいで、日本人はみんなまじめだと思っていましたが、実際に来てみると、勉強も遊びも同じようにしていてイメージが変わりました。



（使用言語に関して）日本の友達に英語で話しかけると、コンプレックスを持っている人もいますので、下手でも日本語で話した方が友達になりやすいという感じがあります。

仲村クスマー（タマサート大学→琉球大学大学院）

私は2007年中学生の時に交換留学生として1年間広島に来ました。その時は日本語が分からなかったのが英語で話していましたが、留学中はとても楽しかったので、その後独学で日本語を勉強し、大学でも日本語を専攻して再び留学をしました。留学中の大学では弓道部に入りましたが、みんな遠慮しているのか、配慮してくれたのか疎外感を感じました。弓道は日本独自の文化なので外国人に分かるのかな？という感覚があったのかもしれませんが。



どの国でも良いところも悪いところもあると分かりました。海外に出たからこそそれが分かったのです。日本人だ、タイ人じゃないなくて、その人個人だとみられるようにしたいと思いました。このような考えで行けば、人生が面白くなると思います。将来はまた別の国にいるかもしれません。グローバルは楽しいと思います。

姜森（ジャンミャオ）（清華大学大学院→東京大学大学院）

来日して4年目です。2015年に1年間留学していたのですが、とても楽しかったので中国で修士課程を終えた後、再び東京大学

の博士課程に入学しました。本格的な日本料理が食べたいという理由もあって大学院留学のプログラムに参加しました。

正直にいうと、中国人に対して偏見を持っている人がたまにいます。でも、ちゃんと中国文化を理解して中国人の立場に立って客観的に中国のことを考えている人もたくさんいます。偏見や差別は人によると思います。



大学院では皆、英語で話しますが、研究室の日本人は普段の会話ではあまり英語を使いたがりません。日本語ができないと日本人と良い友達になりにくいと思いました。10か月くらい経つと日本人と多く話せるようになり、生活が楽しくなってきたように思いますし、もっと日本文化や社会が理解できると思います。

堀 良行（阪和興業株式会社人事部）

（2年前までアメリカ勤務）アメリカは人種のるつぼなので、お互いのことを理解するために自分のバックボーンを話すことに気をつけていますね。日本では（過去には）日本人だけで生活してきているので、共通言語、共通認識があり、仕事でもグループで成果を上げられたのですが、今は外国人も増えて変わってきています。



日本は会議が多いですが、みんなあまり話さないのです。外国籍の方が会議で何かしゃべっても、あまり聞いていないのです。ところが英語で会議をすると、日本人は話せないというわけでもないのですが、もっとしゃべらなくなる。逆に外国籍の人が堪能な英語でしゃべると、ちょっと見方が違ってきます。英語で話すことによって、日本人の上司などが一生懸命聞いてくれるという現象が起きるようです。つまり英語で話すと上下の関係がフラットになるので、うまく伝えられる時がありますね。

今、世界はボーダーレスになってきています。若い人には日本一ではなく世界一を目指して欲しいと思っています。

シム准教授

日本には「他を知り己を知る」という言葉がありますが、相手を知ることによって逆に日本を振り返る機会にもなります。私たち外国人は日本が大好きで来ているのです。それが日本が嫌いになって帰国するととても残念だし、日本にとっても非常にもったいないと思います。面倒くさいことは多少ありますが、面倒くさいからこそ楽しさもあるのです。何も苦勞せずに楽しさはありません。人生は楽しんだもの勝ちです。

“Boys and Girls, Be Ambitious!”

“Ladies and Gentlemen!” 年齢に関係なく “Be Ambitious!” 本日はありがとうございました。

これから訪れる異文化社会の理想像を予感

昨年末よりアジ風に入会し、初めての新春交流会、会場に入らずに思ったことは、「色々な方がいらっしゃるな」ということです。若者（中高生が数多く参加されていました）、ご年配の方（私から見れば!）、そして外国籍の方。当日、私が直接お話しただけでも、中国・ベトナム・タイ・インドネシアの留学生がいました。

交流会でお会いした「色々」な皆様は、具体的に言うならば「私と違う」皆様です。年齢（私は今年25歳になります）、趣味（Youtubeを見るのが好き!）、職業（エンジニア&キャリアコンサルタント）、国籍（日本）。こんな方、私以外にいらっしゃいましたか？

それでも、ディスカッションは盛り上がりました。異文化コミュニケーションについて、区別や差別について。最後、私の班からは高校生の方が発表して、その堂々とした話しぶりに衝撃を受けたりもしました。

ディスカッションが盛り上がった原因は？ 1つは、参加者がそ



れぞれの「違い」について前向きな関心と深い配慮を抱いていたからではないでしょうか。自分とは違う人々に囲まれると、人間は孤独を感じて黙ったり、少し攻撃的になったりします。私が会場に足を踏み入れたときも、「私と違う」人々を見て少し疎外感を覚えました。

そんな異質感も、議論が進むにつれて薄れていきました。互いの年齢や国籍のことを確かに尊重し合いながら、心地よい興味と敬意をもって言葉を交わしていたのが印象的でした。それは、これから訪れる異文化社会の、ある種理想的な姿だったのではと思います。

参加できて良かったです。当日お会いした皆様、運営の皆様、大変ありがとうございました。

（正会員 阿食 寛子）

清華大学から訪問団

1月20日、清華大学の一行（アジ風事務局を担当して下さっている陳朝輝文学部准教授と14名の学生たち）が、アジ風のNPO活動を視察に訪れました。海外研修の一環として、日中友好を支えてきた民間組織の現状調査のためです。半数が日本語専攻以外の学生のため、自己紹介を含め会合は日中英の三か国語で行われました。（理事 上 高子）

実り多い質疑応答

アジ風側からは、理事長をはじめ事務局とIメイト交流を行っている会員など14名が参加しました。冒頭に上高子理事からアジ風の設立目的や歴史、古海正子事務局長から組織・運営・活動報告などの紹介を行いました。その後の親睦ランチの時間も含めた質疑応答では、学生側から「米中間は折り合い点を見つけるにはどうしたらいいか」との質問があり、上理事が「“草の根の相互理解”が必要なので、アメリカ人と個人的な関係を深めること。彼らの考え方や文化を知ること」と答えました。

他にも「中国人の対日感情は大変良くなってきたのに、日本人の対中感情は低迷しているのはなぜか」との質問もありました。対日感情は愛国教育に大きく影響を受けているが、実際に来日して日本人、社会は違っていると認識が変わってきたからではないか

と思われます。情報のバイアスは日本側のメディアにもあるのかもしれない。

陳先生とは個別にこれからの協力のあり方について意見交換をしましたが、先生からは「学生



〈緊張気味の訪問団〉

の日本への関心は相変わらず高いが、日本語学習については変化が起きている。日本企業自体がグローバル化してきて、必ずしも日本語ができなくても英語ができれば採用されるという環境になってきたこと。そのためある程度日本語を習得すると、それ以降はモチベーションが下がる学生が増えてきた。これを打開するためには、例えば、卒業生の3割は起業を目指していることから、大企業だけではなく零細企業も含めた日本企業の紹介・見学などの機会を与えてもらえたらありがたい」というご提案がありました。（理事 伊藤 莞爾）

会員からの投稿

チャン・ツウイ・リンさんの伝統の結婚式に参列

2月28日コロナウイルス騒動の中ハノイへ到着し、翌29日、7時半にリンさんの家に向かった。お婿さんのグエン・ツン・クオンさん（高校同期でハノイ工科大学）がリンさんを迎えに来る伝統の結婚式が9時に始まるという。リンさんは白いアオザイのドレスを着てとても綺麗。式場は白を基調とした上品な飾りつけで美しい。リンさんの家だけでは足りないで隣の2軒の家も借りて、道路の半分を式場に仕立て総勢500人が座れて大がかりで驚いた。入口の箱に参列者は次々とお金を入れていた。9時半、着飾った男女の若者が花飾りを先頭にお菓子等の贈り物を抱えてやって来た。お婿さんと両親が続く。2人ともキリスト教徒なので祭壇の前で祈りを捧げて、贈り物のケーキカット。いったん2人は引き上げ、乾杯の音頭で食事が始まる。私はアオザイで参加したが、近所の人は普通のブラウスに



〈左端が筆者、右端がリンさん〉

ズボンの平服で、アオザイの人は親族以外はいない。リンさんは洋服のウエディングドレスに着替えて2人が再び登場し、壇上で司会者の音頭で再びケーキカットとシャンパン・タワー。延々とカラオケが続き、参列者はひたすら食事をする。11時半には皆食べ終わって引き上げたがその後もカラオケは続いた。

翌3月1日はクオンさんがリンさんの家に両親と共に迎えに来た。皆でバスに分乗してクオンさんの家に向かう。式場は赤を基調とした派手な飾りつけで、広い庭に500人分のイスが並べられていた。リンさんは昨日とは違うウエディングドレス。神父さんがお祈りをして、2人と参列の親族を祝福。次いで壇上で乾杯をして、再びケーキカットとシャンパン・タワーとカラオケが続いた。

同じような式を何故2日に分けるのか疑問に思ったが、田舎では近所の人を多く呼びたいのでそれぞれの家で式をするらしい。都会では1日で一緒に済ませるのだと言う。

（正会員 児玉 久美子）

編集部註：リンさんは児玉さんのIメイトで、2017年に日本で開催した五か国交流会の招待学生。その後広島経済大学に留学。新春交流会プレゼンテーションで2位に入るなど活躍しました。

会員紹介

樋口 京一さん

2018年の西日本地区Iメイト交流会でのこと。能楽体験を楽しんだ後、一般公開が始まっていた京都御所を訪れました。樋口さんは、御所の案内をしようとその場で申し出られ、広い御所をぐるりと案内してくださいました。参加者は、樋口さんの丁寧で分かりやすい解説に大いに驚きました。

実は、樋口さんは、大手酒造会社を退職後、日本各地から京都を訪れる小中学生の修学旅行のボランティアガイドを続けています。ガイドをするのは修学旅行シーズンを中心に年間数十校。樋口さんは、小グループに分かれて京都市中を自由に回る学生たちのために事前にスケジュールをチェックし、計画に無理がないかアドバイスしたうえで、旅行当日には、そのグループに付き添いながら引率、ガイドをしています。希望するお土産を見つけてあげたり、食べたい食べ物があるお店を紹介したり、グループの中で孤立した生徒にはよく目を配るなど、今どきの生徒をまとめながら、全員無事に満足して帰れるよう、きめ細かく取り組んでお

られます。

アジ風への入会は、大学の同じクラブの先輩でありアジ風会員でもある小林俊介さんの勧めからです。アジア各国の若い大学生たちとの交流は楽しそうで魅力的だったし、日本語でのメール交換が主な活動だったので、入会へのハードルが低く感じられたとのこと。

樋口さんのIメイト交流は中国から始まり、タイ、ベトナム、インドネシアと広がっています。Iメイト学生たちは、たいへん熱心であり、あこがれや強い向上心を持っていて、昔の日本の若者を思わせる、自分たちの若いころとどこか似ているとのこと。

樋口さんは、生粋の京都生まれ、京都育ち。若い世代への優しいまなざしを持つ気さくなジェントルマンです。アジアの留学生たち、そして修学旅行生たちとのコミュニケーションを楽しみ、一生に一度の思い出となるような経験を彼らに提供し、またいつの日か京都に帰ってきてほしいと願ってられます。

（インタビュアー： 武田 高）





例年ならば、そろそろ「お花見」の企画で忙しい筈の日本ですが、世界中が新型コロナウイルス対策に翻弄されており、今年の「お花見」は断念せざるを得ないようです。インドネシアでも、このところ感染者が増加しており、バジャジャラン大学でもキャンパス内の活動は通常通りながら、学生はかなり敏感になっているようです。今回のIメイト交流では、畑さち子さんと原谷洋美さんにご登場頂きました。
(バジャジャラン大学Iメイト交流 コーディネーター 齋藤 利治)

畑 さち子さんとベルリアナ ヌクラヘニさんの交流

畑さん→ベルリアナさん

2019年12月18日



インドネシアのクリスマスはどんなことをしますか?日本では家族や友達とパーティをして楽しめます。クリスマスツリーを飾って、チキンやケーキを食べます。プレゼントも交換しますよ。

今はクリスマスのイルミネーションがきれいです。少し写真を送りますね。

ヘニさん、是非クリスマスに日本に来てください。案内しますよ。楽しみにしています。

ベルリアナさん→畑さん

12月26日

インドネシアでクリスマスは聖なる日ですから人々が教会へ行きます。教会でクリスマスツリーときれいな飾りがたくさんあります。さち子さんに見せたくてクリスマスツリーのミサのあと写真を取りました。

他の過ごすやり方もあります。例えばレストランで家族ディナーとか友達の家でクリスマスパーティをしてプレゼント交換します。チャリティーイベントをする人や会社もたくさんいます。

畑さん→ベルリアナさん

2020年1月7日

明けましておめでとうございます。今年もよろしく願います。これは↑、1年のはじめの挨拶です



クリスマスの様子を教えてくださいましてありがとうございました。写真もありがとうございました。とてもきれいですね。日本人の多くはキリスト教徒ではないので、クリスマスはイベントとして楽しまれています。お正月の方が大事です。お正月はおせち料理とお雑煮(お餅の入ったお吸い物)を食べて、神社

に初詣に行きます。年賀状というはがきで、新年の挨拶を、親戚や友人にします。私の年賀状を送りますね。

ベルリアナさん→畑さん

1月15日

あけましておめでとうございます!こちらこそ、これからもよろしく願います。写真も年賀状もありがとうございました。楽しそうな初詣ですね。おせち料理も美味しそうです。いつか日本で新年をお祝いしたいです。

日本文化の授業で日本のお正月を勉強したとき「日本のお正月はにぎやかで素晴らしいよね」と思いました。いい年になれるように頑張ることが感じられます。

原谷 洋美さんとムハマド アズカ アズキアさんの交流

アズキアさん→原谷さん

2019年12月18日

この前パフォーマンスの準備で慌ただしいといいましたね。

こちらはその動画です。かぐや姫と桃太郎の改変された物語で、かぐや姫と桃太郎は兄弟で実は2人とも人間ではなく鬼を退治するためのサイボーグでした。SF的な悲喜劇です。演者も観客も楽しそうだったのでよかったと思います。それにストーリー、BGM、ダンスの振り付(パフォーマンスの最中)も全部私が担当したのでけっこう自信作です。私も演者をやりましたよ。私はどんな役か判りますか。



原谷さん→アズキアさん

12月26日

面白い動画をありがとう。日本のおとぎ話の「桃太郎」と「かぐや姫」が二重三重にもひねられて、摩訶不思議(まかふしぎ=なんともおかしい)劇に生まれ変わったのですね。日本語を学ぶ学生のエネルギーと想像力は素晴らしいです。アズくんは真ん中の主役で舞台回しの狂言師ですね。台本も書き、BGMも振り付けもする。このような活躍を、八面六臂(はちめんろっぴ=なんでも一人で行えること)の大活躍と言いますよ。

原谷さん→アズキアさん

2020年1月17日

年明けの素晴らしいイラスト、ありがとう。とてもびっくりして見せてもらいました。プロが描いたみたいだね。ストーリーもあって、伊達巻きを盗むネズミくんなんてどこから発想するの?

アズキアさん→原谷さん

2月9日

去年の12月JLPTのN2の試験を受け、心配で心配で落ち着けられなかったですけど合格しました。我ながらも驚きました。聴解の部分は満点でしたが、読解部分はBでした。やはり私は読解は苦手です。

イラストの発想のもとなんですが、私は子どものときからずっと獣人が好きで「この動物ひとになったらどんな人になるかな」と妄想したりします。ネズミはよく食べ物を盗んだし、最近のネズミはかしくて罠になかなか引っ掛からなかったしまるで怪盗と思ってイラストにしました。

今後の主な行事予定 * 詳細はHPを参照

4月5日の西日本地区Iメイト交流会及び、
5月に予定していたハノイ貿易大学訪問は
新型コロナウイルスの影響で中止となりました

- 6月13日(土)または14日(日)
足尾銅山跡の植林と森林整備活動
5月初旬に募集開始
- 6月20日(土) Iメイト勉強会
詳細未定
- 9月12日(土) アジ風総会
詳細未定

● ● ● 編集後記 ● ● ●

年明けに中国から新型コロナウイルスのニュース、つづいて大型客船の感染が報道され、この得体の知れないウイルスは日本中に、そしてアジアから欧米にその触手を広げ、世界を席捲しています。日本も学校の休校やイベントの中止が要請され、感染拡大に伴う経済活動の停滞も問題になってきました。コロナウイルスが人間社会を翻弄している様子はあたかも経済優先の現代社会に警告を発しているかのようにも思えます。

人々は不安になればなるほど情報を求めますが、情報は時には社会性や人間性をゆがめてしまうおそれもあります。感染の不安は拭えませんが、なにも予定のないこの日々、ものにあふれた生活を見直そうと、私は断捨離を実行しました。

この新聞が発行される4月上旬には、世の中が落ち着きを取り戻していることを願っています
(奥山 寿子)